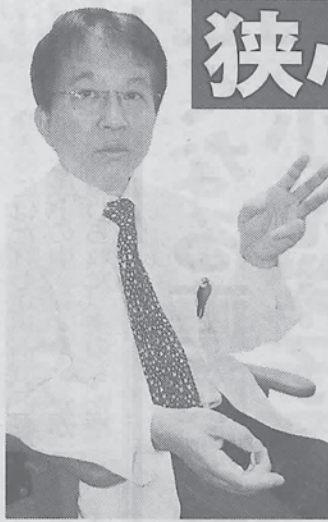


「ダヴィンチ」による 冠動脈バイパス手術が最善

心臓の筋肉へ酸素と栄養を送る血管(冠動脈)が狭くなり、胸の圧迫感や痛みなどを招く病氣といえは、天皇陛下も患った狭心症だ。最近、その治療法として注目されているのが内視鏡下

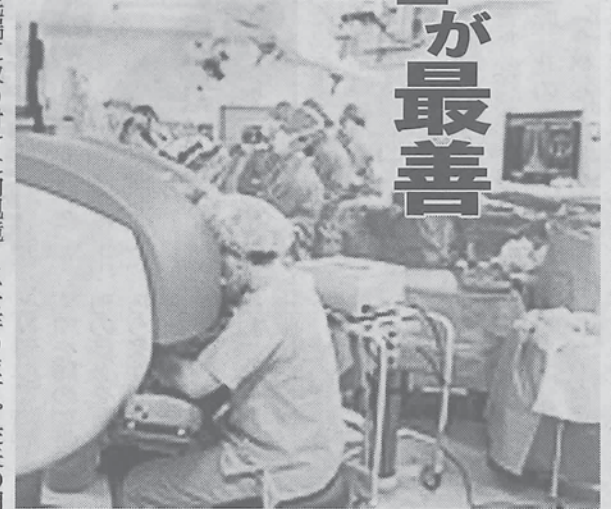
手術用ロボット「ダヴィンチ」を用いる冠動脈バイパス手術だ。「肋骨と肋骨の間に4つの小さな穴(直径1〜2センチ)を開け、ロボットの4本のアームを挿し入れます。執刀医は遠隔操作台に座り、3Dモニター画像を見ながらアームの

狭心症



渡邊 剛教授

金沢大学附属病院心臓血管外科(石川県金沢市)



先端に取り付けた内視鏡カメラや電気メス、ピンセットなどを操作。狭窄箇所の迂回路バイパス

診 受
気鋭医師
フザ
連載47

スを作ります。従来の開胸手術と比べ、患者さんの肉体的負担が極めて軽いのが大きな特長です。こう語るのはわが国の心臓血管外科手術をリードする渡邊剛教授だ。天皇陛下は開胸手術後、速やかに回復された

が、入院期間は約2週間、公務復帰まで2カ月弱を要した。しかし、「ダヴィンチ」による冠動脈バイパス手術ならば、入院期間は約1週間、退院とほぼ同時に日常生活に復帰できる、と

普及が期待される心臓ロボット手術

ところが、今の日本では、狭心症と診断されたら、まずカテーテルを用いる内科的治療(経皮的冠動脈形成術(PCI))を勧められるのが普通だ。PCIとは冠動脈の狭窄箇所までカテーテルの先端を進め、その先端に装着したバルーン(風船)を膨らますことで狭窄箇所を広げたり、ステント(金属製メッシュの筒)を挿入したりして狭

いから素晴らしい。「それというのも、ロボット手術では胸の真ん中にある板状の肋骨を縦に切る胸骨正中切開や、開胸器による切開箇所のないからです」

治療成績を比べてみると、PCIは永続的に何種類もの薬の服用が不可欠で、再治療を繰り返すケースが多いなど問題が少なくない。「ところが冠動脈バイパス手術は、初回手術後に再手術を受けるケースがほとんどありません。そのうえ、胸に4つの小さな穴を開けるだけで済むなど、患者の肉体的負担の少ないロボット手術でも可能になりました。今後はロボットによる冠動脈バイパス手術が狭心症の最善の治療法として広く普及していくでしょう」